

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

何と呼べばいいのだろう。

アイツ、なんて呼べるほど親しくないし、かといって、彼、なんて改まって呼ぶのも変だ。けれど、この前ちようにいい呼び名を思いついた。

「君」だ。

アイツとか、彼なんかより、ずっとぴったりくる。もともと、言葉に出すことなんかないのだから、呼び名なんて、本当はどうでもいいのだけれど……。

つまり、ぼくはしゃべれないのだ。小学校に入る前の事故で、ぼくはそうなった。

それでも、ぼくの小学校生活はいたって普通だ。みんな、ぼくを普通の友達として扱ってくれるのだ。

けれど、六年生になると、そんな日常に変化が生じてきた。その原因は、転校生だった。

始業式の後、久しぶりに教室に集まったクラスメイトの中に、一人知らないやつがいた。そいつのせいで、何もかもメチャクチャになった。

「山本敬吾です。よろしく」

そいつ——敬吾——は、はきはきとした口調で言った。優しそうな目をしている。

そいつの席は、ぼくのとおりになった。

「君、なんて言うの？」

そう聞かれて、ぼくは「会話用」と書かれたノートを取り出し、そこに、

——雨宮 静也

と書いた。

「アミヤ セイヤ？」

——アミヤ シズヤ

そう再び書くと、敬吾は、

「ふーん。ていうか、なんでそんなに書いているの？」

と言った。そこで、

——しゃべれない

と書くと、敬吾は心底おどろいたような顔と声で、

「えっ、それホント？」

と、言った。

「それで、^①友達はどんなの？」

何を聞かれているのか良くわからなかったので、

——別に 普通

と、当たり前さわりのない返事を書いた。

「普通って……しゃべれないんだったら、普通の友達より優しくするとか、そういうのあるんじゃないの？」

どうやら、敬吾の言っていたのは接し方のことらしい。

「ぼくも一回、のどの病気で入院したことあるけど、お見舞い^{みまひ}に来てくれた友達、みんな優しくしてくれたよ。今の君も、似たようなもんじゃん。それなのに、君の友達は他の友達と同じような感じで……」

こう矢つぎばやに言われたら、とても手で書くのでは追いつけない。それで、ぼくはしばらく何も書かないで、話の終わるのを待っていた。

「なんていうのか、それって思いやり無さすぎるよ。だいたい……」

でも、なかなか敬吾の話は終わりそうになかった。いい加減、しびれを切らしたぼくは、ノートに大きく「ストップ！」と書くと、右手にそれを持ち、左手でたたいた。

それでやつとしゃべるのをやめた敬吾は、^③「げんそうな顔でこつちを見た。」

伝えたいことは色々あった。

他の友達より優しくするっていうけど、そんな風にされたら、こつちだって接しづらい。普通に扱ってくれる方が、こつちとしてもいい。普通にしてくれるのが、思いやりなんだ。わざわざ優しくするなんてのは、人の気持ちを考えてない。そんなのは、本当の優しさとは違う。だいたい、人に話すひまも与えないで、自分の言いたいことばかり言ってたじゃないか。それって優しさなのか……。

でも、ノートに書くのには多すぎる。ぼくが実際に書いたのは、
——思いやりなんていらぬ
の一言だった。

ノートをのぞきこんでいた敬吾は、^⑤大きく目を見開いて、その後ぼくを見ると、かなしそうな、同情に満ちた目でこつちを見た。
^⑥おまえの言ってるような思いやりなんていらぬ、という意味だったのだが、敬吾はそのままの意味にとつたらしい。

何かめんどくさいことになりそうだなあ……。なんて思いながら、下校した。

家に帰ると、ぼくは「君」に会う。

会う、といつても、自分の部屋の窓から、道路の向こう側にある家の窓を、見るだけなんだけど。道路の向こう側の窓を見ると、必ず「君」は、そこにいる。

話したことはない。

ぼくはしゃべれないし、「君」も話しかけてこない。ノートの文字じゃ小さすぎて見えないし、大きめの画用紙を使えば見えるかもしれないけど、誰か^{だれ}に見られるとはずかしい。

そんなわけで、ぼくは「君」の名前も知らなければ、誕生日も、好きな食べ物も、得意なことも、何も知らない。なんとなくわかることといえば、ぼくと同じぐらいの年の、男の子だということだけだ。

でもまあ、ぼくはそれで充分^{じゅうぶん}だと思っている。お互いにしゃべらなくても、相手の気持ちはわかる。

今日の「君」は、何となくいきいきとしているようだった。ぼくはというと、よくわからない転校生のせいで、ぼんやりとした顔をしていた。

これで、終わり。別にどうというわけでもない、十分ほどの静かな時間。

それで、充分だ。ぼくは机に座り、宿題をやり始めた。

次の日、学校に行くと、敬吾がさっそく行動を開始した。

朝の会の時、高々と手を挙げると、こう言ったのだ。

「昨日、ぼくは雨宮君と話をしました。どのような話かというと、友達は雨宮君にどう接しているかということです。ぼくは当然、優しく接しているのだろうと思いましたが。しかし雨宮君は、普通だと答えました。それでいいのかとぼくは聞き返すと、雨宮君は、今度は、思いやりなんていらないと答えたのです。雨宮君は、愛にうえているのだと思います。みなさんこれでいいのでしょうか」

そう言うと、敬吾は元のように席に座った。

ムカついたことが、二つ。

ぼくの伝えたかったことを、間違えた意味のまま、大勢の前で発表したりするな。

それと、愛にうえている、なんて気取ったセリフで、周りの同情かったりするな。

気持ちをそのまま顔に表すと、敬吾は、昨日と同じ同情に満ちた目を、こっちに返してきた。

それから、敬吾の熱烈な「雨宮君に愛の手を」運動が始まった。優しさ、とか、思いやり、とか、愛、とかいった敬吾の言葉は、クラスみんなの心に深く響いた。敬吾の類まれなる努力により、どんどん「雨宮君に愛の手を」活動は広がっていった。

初めはばからしいと言っていた何人かも、^⑧周りから白い目で見られるのにたえられず、結局はしぶしぶ活動に入る。

そうやって、あつという間にクラスが汚染された。

ウイルスを流しているのは敬吾なのだが、ほとんどの者は、それをウイルスだと思っていない。それどころか、「愛にうえている雨宮君」を救うための、ワクチンだと思っている。そして、ワクチンを流している敬吾は、救世主なのだ。

救世主敬吾君が現れてから、何もかも変わってしまった。

敬吾の活動が始まってから、何日か経ったある日。

ぼくが校門を出ると、後ろから武田が走ってきて、ぼくの肩をつかんだ。

「おい、何で逃げるんだよ」

武田は、体が大きくてけんかが強い、みんなに嫌われているやつだ。でも、敬吾の活動が始まってから、その武田が急に正義に燃え出した。

愛にうえている、という一言を聞いた武田は、納得し、あわれみ、正義に燃え、勝手にぼくのガードマンになったのだ。武田は、ありえないほどに単純なやつなのだ。

「雨宮、おまえのこといじめるやつは、すぐぶつ飛ばしてやるから安心しろよ」

このセリフを、武田は一日に何度も言ってくる。ぼくをいじめるやつなんて、もともといないというのに。

「雨宮、おまえ最近どうだ？ 嫌なことあったりしないか？ もしあったら、すぐおれに言えよ。わかっているな？ 体の調子は？ 悪くないよな？ ん？」

ぼくがしゃべれないのは、わかっているはずなのに、武田はいろんなことを聞いてくる。

ランドセルの中からノートを取り出せば、武田と会話できるけど、武田みたいなお節介に、そこまでするつもりはない。

「おい雨宮、何とか言えよ、おい。ノート出しゃあいいだろうが。つたく……」

急に、ランドセルを強い力でおさえつけられた。武田が、ランドセルをつかんだのだ。すると、武田はランドセルを開け、中からノートを取り出した。

ふざけんな。勝手なこと、ばっかりじゃないか。

そう思ったぼくは、ふり向きざまにノートをうばい取り、ノートを武田にたたきつけてやろうとした。けれど、^⑨相手が武田だと気づくと、それができなくなつた。どこに怒りをぶつけたらいいのか、わからなくなつたぼくは、ノートを地面にたたきつけ、家に向かって走った。自然と涙がこぼれてきた。

後ろは見なかったけれど、武田も多分、あの同情に満ちた目で、こっちを見ていたのだろう。

家に帰ったぼくは、ほとんど無意識に、窓にかけ寄っていた。すると、やはりそこに、「君」は、いた。

「君」は、けげんそうな顔をしていた。怒っているような、泣いているような、ぼくの顔を見て、何かあったのか気になったのだろう。

何があつたんだい？

「君」が聞いてきた。もちろん、声を出したわけじゃないけど、でも、わかる。

それが……

ぼくも、それに答えようとした。その時、インターホンがなった。誰が来たのだろう。階段をおりて、インターホンの画面をのぞいた。

武田だ。手にノートを持っている。

何なんだよ。

そう思いながら、玄関のドアを開けた。

「ほら、おまえノート置いてつただろ。何で急にキレだしたのかわかんねえけど、これ忘れたらどうしようもねえだろ。でさ、結局おまえなんで……」

わかった、わかったよ。わかったからだまってくれ。ぼくは、武田の手からノートをうばいとして、思いっきりドアを開めた。ドアの

向こう側から、^⑪武田がかなしそうな目で見ているかもしれないと思うと、たえられなかった。

^⑪ノートは、泥で汚れていた。

(中石 海「陽射し」より)

問一、——①「友達はどうなの？」とありますが、敬吾は何を聞こうとしていたのですか。解答欄^{ちん}にあてはまる言葉を文中から抜き出さない。

問二、——②「当たり前さわりのない」・③「けげんそうな」とありますが、この場合の意味としてもっともふさわしいものをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

② ア 興味のなさそう な イ 失敗のなさそう な ウ 影響のなさそう な エ 意味のなさそう な

③ ア ふきげんそう な イ ふしぎそう な ウ きみわるそう な エ きまりわるそう な

問三、——④「思いやりなんていらない」とありますが、本当はどうしてほしいのですか。文中の言葉を使って、十字以内で答えなさい。

問四、——⑤「大きく目を見開いて」とありますが、このときの敬吾の気持ちとしてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 悲しみ イ 喜び ウ 怒り エ 驚き

問五、——⑥「おまえの言ってるような思いやり」とありますが、敬吾の「思いやり」はどこがいけないと「ぼく」は考えていますか。解答欄の言葉に続くように文中から八字で抜き出さない。

問六、——⑦「敬吾の熱烈な『雨宮君に愛の手を』運動が始まった」とありますが、「ぼく」が敬吾の行動を快く思っていないとわかる漢字二字の言葉を文中から抜き出さない。

問七、——⑧「周りから白い目で見られるのにたえられず」とありますが、「白い目」の説明としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア からかうような目 イ 責めるような冷たい目 ウ 同情を含んだ目 エ かなしみにみちた目

問八、——⑨「相手が武田だと気づくと、それができなくなった」とありますが、なぜですか。その理由としてもっともふさわしい部分を文中から十五字以内で抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問九、——⑩「武田がかなしそうな目で見ている」とありますが、その理由としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 本当は優しくしてほしいと思っているのに、素直に表現できず反抗的な態度にでる「ぼく」を気の毒に思っているから
イ いつも親切にしているのに、いつこうにそれを理解しようとしないう「ぼく」とのつき合い方に困りきっているから
ウ 優しく親切に接しようとして努力しているのに、その気持ちを無視して乱暴な態度をとる「ぼく」を不愉快に感じているから
エ 「ぼく」のことを思っただけでわざわざノートを届けに来たのに、感謝の気持ちを表してくれないことがっかりしているから

問十、——⑪「ノートは、泥で汚れていた」とありますが、どのようなことを表現していると考えられますか。もっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 友情にみぞがうまれたこと イ 武田が深く傷ついたこと ウ ぼくが深く後悔したこと エ ぼくが深く傷ついたこと

問十一、「君」は「ぼく」にとつてどのような存在だと考えられますか。もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア クラスの友達には遠慮して打ち明けられないことを具体的に相談できる存在
イ お互いに体に障がいを持つ者としてそれぞれのつらさを理解し、励まし合える存在
ウ 「君」の心に話しかけることで「ぼく」の感情や心を整理させてくれる存在
エ 「ぼく」と反対の発想や態度を示すことで、「ぼく」の間違った点を気づかせてくれる存在

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

堪え性がどんどんなくなっている。じつくり考えなくてはいけない状態に我慢しつつづけられず、すぐに「わからない」と放り出してしまふ人が増えている。

簡単にわかること、理解できることには同質化できる。わかりにくいことは投げ出すだけでなく、切り捨てる。パソコンのように「み箱に入れて消去」する感覚で排除してしまう。そうすると、自分の世界にはもう関係ないことになって安心できる。

否定の取り込み以前に、自分と対立するものとの矛盾を、自分のなかに抱えていらなくなっている。

「意味わかんないんだからしょうがないじゃん」

「いいよ、そんなの知らなくても。関係ないから」

もはや、「意味わかんない」と投げ出すことが、勝ったような感じになっている。そいつが小難しいことを言うのはそいつの勝手。自分には関係ない。

【A】 わかるものだけが楽しい。わかるものだけで生きていく。それではさみしい。

「わからない」事柄に対して、すぐにあきらめてしまい、踏み込んでいこうという意欲をもとうとしない。自分にとって心地よくないもの、不愉快なものを自分の世界に取り込みたくない、という排除意識と似ている。

本来、わかる人とわからない人とがいたら、わからない人のほうが謙虚にそこに耳を傾けなければいけない。自分の理解がそこにたどりつかないことに謙虚さをもたなければならぬ。

【B】 ところが、責任転嫁というか意味のすり替えを行って、この私に理解できるように説明しない相手に非がある、という論理になっている。意味がわからないのは自分の理解力が足りないからだ、と考えなくなってきた。

「わからない」ことに対する謙虚さ※しんし 真摯さがなく。だから耐性も育たない。※たいせい

【C】 その背景には、② レベルの高いものに対するリスベクトの習慣がなくなっていることがあると思う。

わかることはすごいことだという意識がもてれば、わからなさがある期間抱えて、わからうとする努力をする。食らいついていく。わかるようにするために、③ 自分をオープンにしていこう。

とりあえずわかる部分をパズルのようにつなぎ合わせて、そこを理解の小島にして、橋をかけていくようなかたちで、理解の道をどんどんつないでいく。すると、ふと視界が開ける瞬間がある。「わからない」が紆余曲折を経て「わかる」になっていったときの爽快感、すっきり感が訪れる。

わからないから仕方ないではなくて、わからなさのなかにも、食らいついていくうちにわかってくるものがあるという感触をつかむことが、学習の喜びとなる。

そのためには、ある程度「わからない」を抱え込んでいかなければならない。

【D】 たとえば、国語の読解力の問題は、答えが一つに限定されないから面白くない、と言う子どもがいる。だから国語は嫌い。算数は答えが一つで、はつきりしているから好き。

すつきりさを好む気持ちはわかるが、④ 複雑さを消化して妥当な答えを見出す粘りが、現実を生き抜く力になる。

⑤ 単純な答えばかりを求めるようになることは危ない。

【E】 現実で生きていくということは、答えが一つということなど、ほとんどない。白でもなく、黒でもなく、グレーのなかで、自分で答えを導き出していかなければならないことだらけだ。

それぞれ、たとえばこういう条件であればこうなる、こつちの条件であればこうなる、と、出すべき答えは状況によって変わっていく。ときには、「解なし」というものを許容せざるをえないこともある。一つ答えを見出したらもうそれがすべてだと思ひ込んで、ほかの解の可能性を排除することで気持ちを落ち着けるという思考回路では、現実に対応できない。

プラスの価値のなかだけで純粹^{じゅんすい}に育ってきた人ほど、シンプルな解を早急に欲しがる。

「どうなの？ どうなの？」と答えを求める。

「いや、これに解はないんだよ」

「だから、それを自分で見つけるんだよ」

「自分で出した解を正解にするのか誤答にするのかは、その後のやり方によっても変わる。すごく流動的なんだ」

そう言っても、なかなか受け入れられない。^⑦柔軟性のない心が軋^{きし}んで、不快な音を立てるのだ。

内田樹^{うちだ}さんが面白いことを書いていた。

私たちが話をしている相手からいけば聞きたいことは「もうわかった（から黙っていいよ）」じゃなくて、「まだわからない（からもっと言って）」なんですね。

恋人に向かって「キミのことをもっと理解したい」というのは愛の始まりを告げることですけど、「あなたって人が、よくわかったわ」というのはたいてい別れのときに言うことばです。

⑧ 相手に「君が言いたいことはわかった」と言われると、人間は不愉快になるんです。

『先生はえらい』ちくまプリマー新書

人間にはわかりたいという気持ちが根源的にある。もっとわかりたいというのが、自然な、開いたコミュニケーションのあり方であって、好きな人、大事な人のことはもっとわかりたいと思う。

簡単に「もうわかったよ」と言って回路を閉じてしまうのもコミュニケーションを閉じているが、^⑨「わからなくてもいいよ」と放り出すのは、さらに回路が閉じている。

自分が、もっとわかろうとしているか、これ以上わからなくていいと思っているか、わかろうとする気持ちをもっていないか——、これは、そのときどきの心の開き具合、閉じ具合のバロメーターになる。自分を変えていくいろんな要素を引き受け、抱えたまま生きる。

そういう柔軟な頭脳とメンタルのタフさを身につけてほしい。

（齋藤 孝「雑菌主義宣言！」より。一部表記・体裁を改めた）

※真摯^{しんし}……まじめなようす

※耐性……ものごとに対する抵抗力 ※紆余曲折……いろいろと複雑に変化すること

問一、——①「そこ」が指し示している内容を文中から抜き出さない。

問二、——②「レベルの高いものに対するリスpekt」とありますが、どういうことですか。もっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「わからない」ことを投げ出したのに、わかった気持ちになること

イ 「わからない」状態がいろいろな手順を経て「わかる」状態になること

ウ 自分に関係のない「わからない」ことは思い切って切り捨てること

エ 「わからない」ことがわかるようになるのは素晴らしいと考えること

問三、——③「自分をオープンにしていく」とありますが、どうすることですか。もっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 不愉快なものを進んで排除すること イ 理解しようとする気持ちを持つこと

ウ 理解できることに同質化すること エ プラスの価値の中で成長していくこと

問四、——④「複雑さを消化して妥当な答えを見出す粘り」とありますが、これを発揮するために必要なものとしてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア いろいろな要素を引き受け抱えていく力 イ できるだけシンプルに解答を導き出す力
ウ 純粋なプラスの価値だけを信じ抜く姿勢 エ 矛盾する解や「解なし」を認めない姿勢

問五、——⑤「単純な答えばかりを求めるようになることは危ない」とありますが、その理由を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文中から十字以内で抜き出しなさい。

単純な答えばかりを求めていると から

問六、——⑥「グレー」とありますが、これにあてはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 単純な答え イ 流動的な答え ウ 状況によって変わる答え エ 複雑な答え

問七、——⑦「柔軟性のない心」とありますが、どのようなものですか。そのことが説明されている部分を文中からさがし、最初と最後の四字を答えなさい。

問八、——⑧「相手に『君が言いたいことはわかった』と言われると、人間は不愉快になるんです」とありますが、その理由を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文中から十字以上十五字以内で抜き出しなさい。

相手が自分に対して と言っているように判断するから

問九、——⑨「わからなくてもいいよ」とありますが、この気持ちを表した十字以上の台詞を文中から二つさがし、それぞれ最初の五字を答えなさい。

問十、本文を次の小見出しに従って三つの意味段落に分けるとすると、第二段落はどこから始まりますか。 A E の中から選び、記号で答えなさい。

第一段落 わからないことを放り出してしまう理由

第二段落 わかることの喜び、爽快感

第三段落 さまざまな答えを抱えることの大切さ

三、次の——①～⑩を、漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

①とうふの原料は大豆だ。

②日本語の母音は五つある。

③むだに時間を費やす。

④浴道には屋台が並んだ。

⑤果物がよく熟れている。

⑥日本はボウエキが盛んな国である。

⑦運動会は雨でジュンエンされた。

⑧天気の良い日はコガイで遊ぼう。

⑨センモン医に治療を受ける。

⑩ナゴやかな雰囲気が好きだ。